

前哨 大阪毎日新聞社長 本山彦一

著者	米田 文孝, 井上 主税, 山口 卓也
雑誌名	なにわ大阪と本山彦一 : 大正期大阪への貢献と本山考古室 : 研究成果報告書
ページ	1-10
発行年	2020-03-14
URL	http://hdl.handle.net/10112/00020248

大阪毎日新聞社長 本山彦一

米田 文孝 関西大学文学部教授 博物館館長

井上 主税 関西大学文学部准教授

山口 卓也 関西大学博物館学芸員

本山彦一という人物

明治から昭和初期まで大阪毎日新聞社長をつとめた本山彦一は、関西大学にとって、大正期から昭和の逝去まで関西大学法人評議員でもありのちに博物館の重要な収蔵資料群の一つとなる「本山コレクション」の蒐集者でもあった。関西大学博物館は、この考古学資料を大学の教育と研究に資するために活用し、またその価値の発信を行ってきた。その数は約2万点あり、重要文化財16点をはじめ重要美術品なども含んでおり、大学博物館に所蔵される有数のコレクションとして、国の登録有形文化財に登録されている。

本山コレクションの発見経緯について判明したことを適時紹介し、また資料の研究成果についても、博物館の紀要と彙報「阡陵」に発表してきた。また、展示会として、2011年には「本山コレクションの由来」、2017年には「河内国府遺跡発掘100周年」を開催し、コレクション形成の経緯や本山自身の発掘成果を公開してきた。本山コレクションについては、大学外からの研究協力依頼や展示貸し出し依頼も頻繁であり、さらに博物館実習など博物館学芸員資格科目や考古学関係科目では、授業の中の実物実習などに供している。このように関西大学にとって、考古学や歴史学の教育と研究に「なくてはならないもの」になっている。

この本山コレクションは、本山彦一の逝去後、本山家から末永雅雄が教授として赴任した関西大学に譲渡されたものであるが、もともとは大阪府濱寺の本山私邸横に開設された富民協会農業博物館本山考古室に展示・保管されていたものである。これを関西大学博物館が引き継いだことを尊重して、本博物館でのコレクション管理は、末永雅雄の『本山考古室要録』の登録番号をもととした管理台帳で運営することとなっている。博物館で本山コレクションを扱うとき、博物館員は本山彦一を必ず想起することとなる。関西大学博物館にとっての本山彦一という、いままで意識されてきた人物像は、「本山コレクション」蒐集者、その社会的な「肩書」としての「大阪毎日新聞社長」であった。

しかし、なにわ大阪にあって、本山彦一は実に多くの事績を残した人物であった。兵庫県の地方行政や地方新



図1 本山彦一

聞社での活躍、藤田組の支配人、山陽鉄道や南海鉄道などの鉄道経営、大阪製糖の経営、さらに大阪毎日新聞の経営に参画して社長となり、東京日日新聞を合併して、今の全国紙毎日新聞の礎を築いた立志伝中の人物である。最後には、貴族院議員に勅選されている。新聞社経営をはじめ、企業人言論人としての手腕と業績をたたえる評伝や論考も多数ある。また、大阪毎日新聞社に慈善団を設けたこと、『英文毎日』や『点字毎日』を発行するなど、社会事業に熱心であったことなどを強調する論考や謝辞もある。

一方、広く流布する本山の紹介には、本山コレクションや本山の考古学研究についての評価は、ほとんど見ることができない。今や本山という人物像は、あまりにも拡散しており、焦点を結ぶことが難しいことが看取できよう。換言すると、大学博物館としての人物像と一般に流布する人物像との間に、大きな隙間があると認識する状況があったのである。

また、本山コレクションを展示収蔵する本山考古室のあった富民協会農業博物館についても、今になってどのような存在か、実にあいまいなままであったことも気が付かされるが、そもそも、「富民協会」「農業博物館」「本山考古室」という三段重ねの構造は、どう成り立ったのだろうか。

そこで、その隙間を埋めて、さらに本山コレクションを形成した人としての本山彦一の人物像により鮮明な焦点を結ぶため、私たちは関西大学なにわ大阪研究センターでこの研究プロジェクトを企画することとなった。

本山の新聞経営や企業鉄道経営などについては、すでにそれぞれの分野で評価があるので、私たちの焦点として、本山彦一が本山コレクションを蒐集した時期、当時の大阪の経済的、社会的状況をふまえ主に大正期から晩年の昭和初期までの間、本山がどのような事績を行ったか、社会貢献の経緯や動機、科学や学術への取り組みや支援の在り方、考古学研究、また「富民協会農業博物館本山考古室」とは、どのようなものであったかを中心に解明する必要があると考えた。

この目的を達成するため、本山の行った社会事業や殖産興業農業振興、本山の設置した富民協会と農業博物館、さまざまな学術振興、農業博物館に設けられた本山考古室、関西大学博物館に引き継がれた「本山コレクション」を調査し、大きく3つの領域を設定して、第1領域「大正期大阪と本山彦一、大阪毎日新聞、関西大学」、第2領域「本山彦一の社会事業と富民協会農業博物館、本山考古室」、第3領域「本山彦一の大正期近畿地方先史時代遺跡調査」として研究の成果を報告して、いままで断片的に評価されてきた本山彦一像を、新たな人物像に再構築して示すことを目指した。

以上を通じてこの研究プロジェクトでは、本山彦一という人物像、精力的な活動を行った大正から昭和初期の「なにわ大阪」を描き出したい。

本山彦一の生涯と福澤諭吉

今回の研究プロジェクトをはじめるとにあたり、前哨として本山彦一の事績として広く認知されているものをみてみたい。本山彦一の優れた伝記として、1937（昭和12）年に刊行された、故本山社長伝記編纂委員会の『松陰本山彦一翁』がある（資料篇：本山彦一関係年譜）。

本山彦一は、1853（嘉永6）年、熊本で下級武士三人扶持御切米七石の家に生まれ、12歳で家

督を相続。藩校で学んだが、廃藩により知行が召し上げられて、困窮した。1871（明治4）年に上京して箕作秋坪に学び、1874（明治7）年に租税寮に出仕した。1876（明治9）年、慶應義塾に入学し、福澤諭吉に師事し、新進の論客として在学中に「協議社」を組織し、新聞に投書を始めた。1878（明治11）年に兵庫県属として任官、神戸師範学校長などを歴任する。

その後、福澤諭吉の時事新報に参画し、藤田組支配人となる。岡山県児島湾開墾と山陽鉄道建設に従事、同時に明治生命、大阪製糖などの役員を歴任する。1898（明治31）年、関西経済界に推されて大阪毎日新聞の役員となり、1898（明治31）年に原敬が社長になると、両者分担して社務に当たり、原敬が政界に転じた後、1903（明治36）年に社長となる。新聞経営に年次予算方式を導入して近代化、広告掲載営業、販売網拡大に取り組み、さらに「新聞商品主義」を提唱する。

1911（明治44）年、東京に進出して日刊紙『東京日日新聞』を吸収して、全国紙「毎日新聞」の礎を築いた。同年、大阪毎日新聞慈善団を立ち上げた。それまで赴任地に合わせて住所を転々としていたが、大阪府泉北郡濱寺に居を構える。1915（大正4）年には、大阪府濱寺に新しく本山邸を竣工。1921（大正10）年、臨時国語調査会委員として漢字制限を提議した。1922（大正11）年、『エコノミスト』『サンダー毎日』『英文毎日』『点字毎日』を発行した。1927（昭和2）年、さらに本山自身の私立財団法人「富民協会」を設立する。明治生命保険相互会社取締役や、東亜調査会会長、国際観光委員会や文政審議会などの委員を兼任した。1930（昭和5）年に貴族院議員に勅選された。1932（昭和7）年12月30日、逝去した。翌年1933（昭和8）年1月6日、大阪四天王寺にて大阪毎日新聞社葬が執り行われ、阿倍野墓地に葬られた。

困窮した幼少期から青雲の青年期、さまざまな分野への挑戦の壮年期を経て、藤田組から大阪毎日新聞社に転じて大成の熟成期の遷移を見ることが出来る。一瞥して、青年期から壮年期、兵庫県や新聞社、藤田組などさまざまな役職、地位、職務についていて、尋常でないほど同時進行もあって、一見すると職務に一貫性がないような職歴であるが、伝記からは本山彦一が、それらすべて完璧かつそつなく達成して成果を上げたことが読み取れる。役割を達成したから、さらに本山周辺から期待が高まって、重ねて次の役がやってくるという、高速回転がおこったのだろうか。一方、大阪毎日新聞の役職に就いた熟成期からは、本望本懐天職の如く集中し、在職43年間、本来本分と



図2 本山の開墾した児島湾



図3 大阪毎日新聞社社屋全景

構想実現に力を発揮するよう、勇猛邁進する姿が見える。青年期から壮年期のさまざまな経験と見分が、熟成期に生かされたのだろう。

本山彦一と接点のあった人物のなかで第一に取り上げなければいけないのは、福澤諭吉であろう。1866（慶應2）年、福澤の『西洋事情』が刊行されて、早くから本山は熱心に熟読した。本山が上京した1871（明治4）年、中村正直の『西国立志伝』が刊行され、翌年続いて福澤の『学問のすゝめ』が刊行された。これらは、のちの『民間経済録』と合わせて、本山の骨肉の書物となった（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 72）。熊本の下級武士という出自から、「セルフ・ヘルプ」の精神で身を立てようとする本山に、新しい時代のエトスを吹き込むものであったのだろうか。師事した福澤から才覚を認められた本山は、1877（明治10）年、不平等条約改正に関する論文を「近事評論」に掲載した。英字新聞に訳載されたこの論文は、大反響を呼んで、福澤門下の新鋭論客の一人として頭角を現した。

福澤の慶應義塾では、九鬼隆一や高橋義雄、朝吹英二、中上川彦次、荘田平五郎、山本達雄、豊川良平、吉川泰二郎、馬越恭平、小林一三などと人脈を築いたが、この後、さまざまな局面で事業への協力、政策実現や学術支援を交換する人的ネットワークとなった。また、骨董趣味や茶事でも交流を続けたが、これは後に表に出ないプロトコルとして大きな布石となったようだ。

1882（明治15）年、政党政治の混迷から既存新聞が政党機関紙のようになったことから、不偏不党の新聞がなければならぬとして、福澤諭吉と慶應門下生が集合して時事新報が創刊される。この時事新報創刊号の「本紙発兌の趣旨」には、福澤諭吉の時局認識を反映して、「いわゆる政党なるものにあら」ず、「他の党派新聞の如く一方のためにするものにあら」ず、「独立不羈（ふき）」の精神の新聞としたい旨が掲げられた。「ただ大いに求むる所は国権皇張の一点にあるのみ」と宣言し、「政も語るべし、学事も論ずべし、工業商売に道徳経済に、およそ人間社会の安寧を助けて幸福を進むべき件々はこれを紙に記して洩らすなきを勉むべし」とする。

「専ら近「時」の文明を記して、この文明に進む所以の方略「事」項を論じ、日「新」の風潮におくれずして、これを世上に「報」道せんとする」から文字を取って、『時事新報』と称した。新聞という言論手段を主宰する福澤諭吉は、「文明」を主唱する根っからの啓蒙思想家であった。

本山彦一は、31歳の時、この時事新報の創刊に参加し、総編集（現在の整理部長）や会計局長を歴任している。掲載される論説は、福澤の立案または検閲があって、本山の手を経て多くの論説が掲載された。本山にとって、福澤のもとで新聞記者と新聞経営者の実力が養われたことは、のちの大阪毎日新聞社の言論をまとめ、企業として運営し、さらに社会事業を実施するときに大きな財産となっただろう。1886（明治19）年、時事新報社を退職して、藤田組支配人に就任している。

このように、青壮年期の福澤諭吉のもとでの天分発露は、本山の熟成期へつながることになったであろう。本山は、このような人脈にあって政治論議には興味情熱を発揮したが、実際の政治運動には冷淡であって、実際の政治に距離をおく福澤諭吉の姿勢に感化されていたとの評がある（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 36）。

さらに本山彦一は、自身の構想を実現するにあたり、それぞれの場面での的確な助言者、協力者を求め招聘していたであろうことにも視線を向けておきたい。慈善団や富民協会の設立、農業博物館

構想への示唆、本山コレクション収集や考古室の展示構成などの重要な事績すべてには、ふさわしい助言者、協力者がいて、また能力のある実務者が配置されていたことも見えるであろう。

以上、本山の生涯と福澤諭吉、慶應義塾閥のかかわり、助言者協力者、実務者の存在を予期した。この本山プロジェクトの三つの領域研究の中には、本山彦一の事績で福澤諭吉、慶應義塾門下の交流が明確にうかがえるであろう。

合理主義的日本人本山彦一

本山彦一は1917（大正6）年、歴代帝陵巡拝図を配布した時、「御歴代の御陵のうちには、学問上から申すと、多少相違しているところがある。しかしこの御陵は何天皇の御陵であると御当代の陛下が御治定になったところを、その天皇の御陵として拝すればよい。御治定に相成った御陵には、神霊がお宿りになっていることであるから参拝する上から申せば、それで有難いのである。別にその相違を詮議立てする必要はないと思う」と述べている（故本山社長伝記編纂委員会1937 p 4）。考古学的にみて、歴代天皇の陵墓として治定するには間違いがあることを認めながら、そう見立てられているなら、率直に参拝すればよいとする。

明治に青壮年期を過ぎた本山彦一にあって、不平等条約改正の論壇に一石を投じた立場からは、近代的日本人の自我として、あいまいな幕藩体制よりも国家として核心の明確となるべき、明治の皇室中心主義があった。日本を一つの家族とみなして、家長として天皇を擬し、外患に抗おうとする心理であり、むしろ、西欧列国に対しての自己防衛的心理の発露であったかともとれる。本山彦一の逝去後に顕在化する盲目的な昭和「皇室至上」とは、意味合いで大きく異なっていて、近代的な抑制の効いたものであった。

その中で、皇室の歴代陵墓比定にあって、学問上の疑問があることと、天皇家の歴史を尊重して参拝するときの心持とを、合理的に区別し、共存できることを記したものと認められる。あくまで陵墓は、日本国を家族とみなしたときの統合の象徴であり、一種の「依り代」であることを期したことになる。当然、陵墓を考古学をはじめとした学門の研究対象と見なしていることにもなる。

この1917（大正6）年は、本山彦一が鳥居龍蔵とともに近畿地方で先史時代遺跡の探策に乗り出し、河内国府遺跡の発掘をお膳立てし、多くの人類学者や考古学者を招致、みずからも本山発掘隊を組織した年である。この時代の発掘では、発見された人骨から日本人の起源についての研究が行われ、日本人の起源や先日本人の人種論争が巻き起こっていて、本山の発掘勧誘は、当時の科学的な研究を促進させる意図があった。本山の考古室も、自身が研究に資するために公開したもので、幅広く学会の知見を求める姿勢であった。自身が手を染めるより、ふさわしい専門の学者、研究者を支援して、成果を還元させるほうが良いと考えたに違いない。

のちに京都帝国大学の濱田耕作教授や、東京帝国大学の鳥居龍蔵講師と交流しながら、朝鮮半島や中国の先史時代遺跡に関心を広げるのは、日本人・日本文化の起源と周辺文化の交流を、調査研究の前線で自らも確かめたいという願望があったからであろう。陵墓と同じように、神話上の国史と、研究の結果として明らかになる日本人の起源は、競合しないものとされた。

この頃、国民教育として神話をもって歴史であるとする強制は未だ始まっておらず、本山の大阪

毎日新聞も、考古学人類学の新発見を速報し、また学門上の論争を紹介している。まさに日本国中、本山のいる大阪にも、科学的な精神をもとめる時代的空氣が横溢しており、本山彦一は、積極的に学術研究の支援を行う立場であった。まさに福澤諭吉の『学問のすゝめ』の、学ぶ姿勢から一步進めて、本山は「勸学」の立場をとっていたことになる。

このような合理主義的日本人であった本山彦一の姿勢は、早くも明治期、会社経営の方針立案や社会事業の展開のなかに見出せるだろう。社会的慈善事業として、みずから合理的に費用対効果で損益を考え、効果が見極められた場合、その事業を発起したこともその発露であろう。この研究の第1領域で取り上げる大阪毎日新聞慈善団の設立は、まさに本山の自我、時代のエトス、合理主義から発想されたものであった。慈善団は、社会にとってむしろ利益を得ることのできる合理的な「事業」であるとして、大阪毎日新聞社をあげて組織運営することとしている。

さらに、第2領域で取り上げる、みずから財団法人富民協会で農業振興に乗り出したことや、大阪毎日新聞の行った学術研究調査への支援貢献事業は、その姿勢を広げたものであり、本山の時代を先取りするかのような近代的合理主義が発現されたものであろう。

農業博物館と本山考古室その後、末永雅雄

本稿の最後に、本山彦一と末永雅雄（1897～1991：関西大学名誉教授）の「縁」を紹介したい。1930（昭和5）年、神田孝平男爵旧蔵資料の散逸を防いだ本山彦一は、濱寺の私邸で資料の内覧会を催し、末永雅雄は京都帝国大学の濱田耕作教授とともに参加している。

それに先立って、本山彦一の肥前有田の古磁器窯発掘は、1929（昭和4）年から31（6）年の

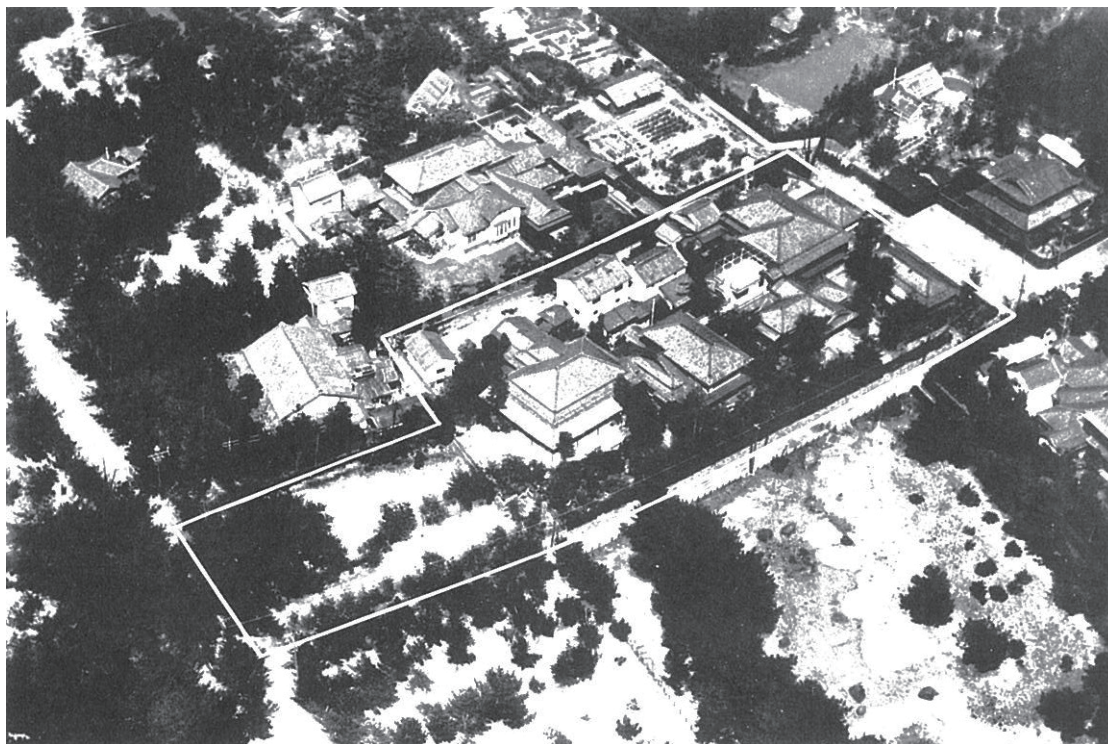


図4 大阪府濱寺羽衣の本山邸

間に行われた。当時知られていた古磁器窯 60 数基の内 38 基を大阪毎日新聞社員であった大宅経三が発掘して、大量の古磁器を入手、初期磁器研究の緒端となった。このころ、本山の関心は先史時代から陶磁器に広がる。1931（昭和 6）年、関西彩壺会講演会では、「従来陶器そのものにはあまり興味を持たなかったが、今後は各位の御指導を得て、一段とこの方面にも精進して行きたい」と述べる。この有田の古磁器窯発掘を、本山の三大発掘の一つとして成果を自負した（故本山社長伝記編纂委員会 1937 p 536）。それまで、茶器などとしての古陶器蒐集には積極的でなかった証拠として見とれるもので、実際それほどの骨董的な蒐集に興味はなかったといえる。ただ、有田磁器の起源研究、日本での陶磁器文化の変遷に興味が高まったことから、その蒐集と調査研究への意欲が芽生えた。続いて、大阪毎日新聞社員井上吉次郎により、尾張美濃の陶器古窯を発掘している。

本山は、1931（昭和 6）年、日本の陶磁器文化起源を明らかにしようと、大阪府泉北郡西陶器村土山の須恵器窯を発掘するが、この調査は京都帝国大学考古学教室員の末永雅雄が担当しており、濱田耕作教授を介して、本山と面識が出来ていたことがわかる。日本の在来土器と新来の須恵器の関係を調査したいと企画された発掘に、新進気鋭の研究者である末永を充てたことに、本山彦一の人物鑑定眼がうかがえる。晩年まで、考古学的調査と研究を最後まで企画したことは、学術的視点と探求心、さらに学術への寄与支援の心を失わなかった証しである。この実績が、さらに本山考古室の全面的な資料整理と目録の作成という大事業につながったのだろう。

富民協会農業博物館本山考古室の展示収蔵の考古資料目録は、本山彦一からの依頼で、京都帝国大学考古学教室濱田耕作教授が派遣した末永雅雄が 1931（昭和 6）年頃から担当して整理作成したもので、作図担当として小林行雄（のちに京都大学教授）が参加した。当初は濱寺の本山私邸で整理をはじめ、農業博物館が竣工してからは農業博物館内で作業が行われた。

濱寺の本山私邸は、旧私邸を建て直して 1929（昭和 4）年に竣工した。本山彦一の御孫である上杉康彦氏によれば、本山は藤田組支配人の時、南海電鉄の経営にも関与していた。南海電鉄は、明治 36 年に難波・和歌山間が開通したが、沿線のことを熟知していたという。前半生の赴任先を転々とする生活を終えて良地に定住し、各地に分散した一族をまとめる機会として、地の利の良い濱寺を選んだのだ、との示唆をいただいた。



図 5 本山邸茶室と書「養眞」



図 6 書斎机

この濱寺には、本山の私邸に隣接して、相次いで富民協会本部や農業博物館が設けられて、一種の「本山理想郷」の様相が現実化する。濱寺公園に隣接する海岸には、1906（明治39）年、日露戦争戦勝記念事業として、大阪毎日新聞社が濱寺海水浴場と水練学校を開設した。国民への「海事思想」の育成と普及を目指し、広く健康増進と古式日本泳法の伝習を図ったが、近隣に私邸を構える本山の差配があったからであろう。1922（大正11）年から逝去する1932（昭和7）年まで、本山は水練学校長を勤めている。

青壮年期、目まぐるしく事業や課題に取り組み、各地を転々としてきた本山彦一は、43年間の永きにわたって大阪毎日新聞社を育て上げ、またさまざまに貢献してきた大阪の一隅である濱寺に初めて定住して、「終のすみか」を設けたことになる。本山の考古資料の蒐集が続き、昭和初期には膨大となっていて、保管空間を確保することも理由の一つであろうか。

そう考えると、1930（昭和5）年に神田孝平旧蔵資料を購入できたのも、建て直された私邸で十分な保管が可能となっていたこともあろう。大正6年の畿内先史遺跡調査の喜志遺跡や河内国府遺跡の試掘など発掘資料を、「石油箱三杯に満たし直に道明寺驛長の好意によりて濱寺本山邸に送致し」、「堆積された採集品の大整理にかゝる、茲に豫定の二十一日間は満了した」（大阪毎日新聞1917）のは、改築前の旧私邸であったことを付記しておく。

本山彦一逝去の後、末永雅雄の『本山考古室図録』『本山考古室目録』『本山考古室要録』が刊行されている。資料整理完了後、本山家の貞雄（のち二世彦一）氏と相談して、末永雅雄が考古室の管理を続けた。

太平洋戦争が始まると農業博物館建物は軍に接収され、屋上に対空砲火器が設置されて部隊が駐留し、隊員居住のために農業博物館内の展示物や陳列ケース、考古資料の棚が移動されて、展示や資料が損失・破壊される危惧があったため、末永が重要資料を地下倉庫に移動したという（末永1986）。

戦争が終わると、浜寺公園周辺がアメリカ軍に接収されて、富民協会は農業博物館を閉館することを決めた。農業博物館の展示品は、すべて伊勢神宮農業館に譲渡されている。農業博物館の建物は、1947（昭和22）年に高石町立中学校校舎となり、のちには大阪府羽衣青少年センターとして利用されたが、現在は取り壊されている。なお、富民協会は、2004（平成16年）年まで存続した。

本山考古室の本山コレクション一括は、本山彦一が大正期から逝去までの長期にわたって関西大学の評議員を続けた縁もあって、本山考古室の目録作成に尽力した末永雅雄が着任した関西大学に譲渡する

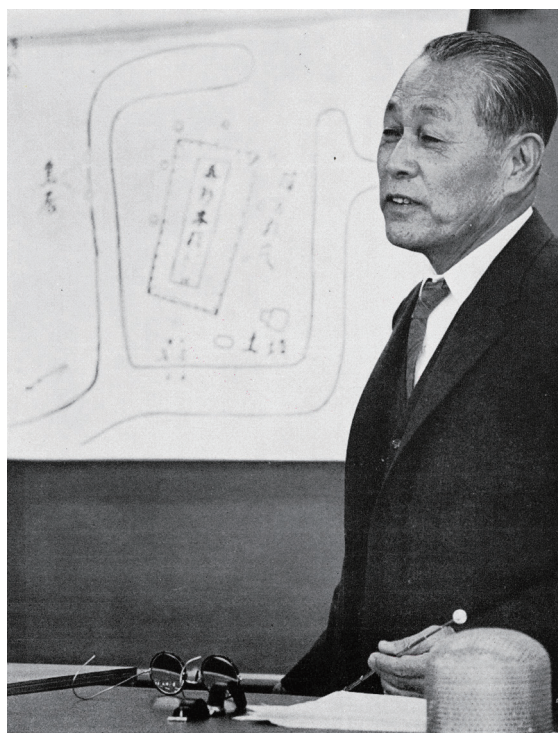


図7 末永雅雄関西大学名誉教授

こととなり、1963（昭和 39）年度まで年次計画で引き渡しが行なわれた。戦中・戦後に避難的に繰り返された移動で混乱があり、関西大学の現所蔵台帳と突き合わせて、重要美術品指定銅鐸など本山考古室目録要録の登録からは少し欠落があることが判明している。末永雅雄は、関西大学千里山キャンパスの旧図書館 3 階に設けた考古学研究室の隣と廊下に、狭い資料陳列室を設けた。本山コレクションを収めた木製展示棚と収納木箱がぎっしり並ぶ様は、あたかも本山考古室旧観を彷彿とさせたという。

末永雅雄は 1938（昭和 13）年、奈良県橿原神宮外苑の遺跡調査のため橿原考古学研究所を設立した。考古学教室員であった京都帝国大学に文学部陳列館があり、富民協会に農業博物館があったことをふまえて、考古学調査と研究、普及と社会還元のため、1940（昭和 15）年に附属の大和国史館（現奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）を開館した。赴任した関西大学でも、学術の研究と教育のために、それぞれの学部、学術領域で博物館が必須であるということを強く提言することになる。橿原考古学研究所や京都帝国大学、富民協会、そして関西大学の果たすべき使命と機能を熟知した言葉である。

末永雅雄の考古学研究室に設けられた考古学資料（陳列）室は、1974（昭和 49）年に岩崎記念館 4 階に移転して文学部の組織として関西大学文学部考古学等資料館となり、さらに 1985（昭和 60）年、旧図書館建物に移転・拡大し、1994（平成 6）年から大学図書館と同格の関西大学博物館となっている。



図 8 関西大学博物館常設展示室

参考文献

- 大阪毎日新聞慈善団 1931 『大阪毎日新聞慈善団二十年史』 大阪毎日新聞慈善団
- 関西大学博物館 2010 『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』
- 関西大学博物館 2011 『本山コレクションの由来』 関西大学博物館
- 関西大学博物館 2017 『パンフレット 河内国府遺跡発掘 100 周年』
- 故本山社長伝記編纂委員会 1937 『松陰本山彦一翁』 大阪毎日新聞社
- 故本山社長伝記編纂委員会 1937 b 『松陰本山彦一翁遺稿』 大阪毎日新聞社
- 未永雅雄 1935 『富民協会農業博物館本山考古室要録』 岡書院
- 未永雅雄 1986 『常足無限』 関西大学教育後援会
- 徳田誠志 2013 「神田孝平から本山彦一へのバトンリレー」『阡陵』 No.66 関西大学博物館
- 中村正直 1871 『西国立志編』
- 西村健吉 1933 『富民強身』 明文堂
- 西村健吉 1937 『財団法人 富民協会十年史』 財団法人富民協会
- 福澤諭吉 1870 『西洋事情』
- 福澤諭吉 1872 『学問のすゝめ』
- 本山彦一 1927 『財団法人富民協会設立趣意書』
- 山口卓也 2011 「本山コレクションの由来」『関西大学博物館蔵 本山コレクションの由来』 関西大学博物館